

世界化学年フォーラム

～Chemistry - our life, our future : 化学からのメッセージ～

日本化学会常務理事 川島信之

12月17日(土)、我が国における世界化学年の最終の公式イベントとなる世界化学年フォーラムが、京都市の国立京都国際会館で開催されました。

このフォーラムは、12月17日と18日の2日間開催された内閣府主催の“科学・技術フェスタ in 京都 2011”の中で企画されたもので、世界化学年日本委員会が主催となり、関連する学協会が共催しました。

はじめに、野依良治先生(理化学研究所理事長・世界化学年日本委員会委員長・2001年ノーベル化学賞受賞者)が、『化学は我らの人生、我らの未来を創る』と題した講演を行いました(座長: 檜山為次郎先生・中央大)。聴衆のメインが高校生であることを意識され、不斉合成の概要をわかりやすく解説されただけでなく、ゴーギャンの不朽の名作“我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこに行くのか”を引用し、自らの生い立ち、化学とのふれあいのきっかけ、若い世代へのメッセージについて熱弁いただきました。

また、化学は単なる自然観察の科学ではなく、無から有を作る価値創造の科学であることを力説されました。化学を目指すための心構えとして、何をやりたいのか目標を持つこと、好奇心や思い入れを強く意識し“少数派の誇り”を持つこと、物事を多角的に見る習慣・そのために場所を変えて動くことをあげられました。独創的研究のためには運も必要なこと、セレンディピティの重要性、良い解答より良い問題を作ることを目指せ、科学研究とは果てしなく続く知の旅であり目的地への到達よりも様々な出会い・良い旅自体に意味があるなど、含蓄のある言葉をいただきました。次世代を担う若者に対して、アナン第7代国連事務総長が掲げた人類の最優先課題「WEHAB+P」、すなわちW(水)E(エネルギー)H(健康)A(農業)B(生物多様性)とP(貧困)に積極果敢に取り組んでほしいと訴えました。最後に、日本のNational Vision(国是)として、“限りある地球の枠組みの中で、人類の生存に貢献する国”を提案し、若者にバトンを渡したいと結びました。

続いて、座長の村井眞二奈良先端科学技術大学院大学副学長、4名の高校生、栗岡誠司兵庫県立明石北高校校長・日本化学会近畿



講演後の質疑応答



右：栗岡誠司先生、左：野依良治先生



パネルディスカッション 4名の高校生

支部委員のパネルディスカッションが行われました。高校生から、「教科書が物足りないときはどうすればよいか」、「感性を磨く方法は」など意見や質問が出ました。栗岡校長は、「理科だけでなく文学や歴史なども学び、幅広い視野を持つことが大切」と答えられました。野依先生は、最後に、「夢と責任を持って生きて欲しい」とエールを送りました。

パネル討論後、巽和行・名古屋大学教授・IUPAC 副会長より、世界化学年を通して、世界中の優秀な若者と触れ合うことができた、日本でも若い世代の情熱と意気込みを感じたと締めくくられました。

企画と実行に尽力いただいた、日本委員会の加藤隆史先生（東大）、大野弘幸先生（東京農工大、安平次重治様（宇部興産）、石田裕様（事務局）、近畿支部の森敦紀先生（神戸大）、田中庸裕先生（京大）、松原誠二郎先生（京大）始め、関係者の皆様にお礼申し上げます。



ディスカッション終了後の1コマ